北岡泰典特別書き下ろしエッセイ

150 億個の脳神経細胞すべてをコントールして「神の踊り (リーラ)」に変える方法

written by 北岡 泰典

July 2024, Ver.2

著作権: メタ心理学研究所 c/o (株) オフィス北岡

https://www.office-kitaoka.co.jp

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

献辞

本エッセイを以下のお二人に捧げます

私の精神的導師のバグワン シュリ ラジニーシ

&

私の認識論的教師のジョン グリンダー

目次

	ページ
1. 前書き	3
2. 「絶対抜けられないと思えた『身体的蟻地獄』」からの脱出法について	6
3. 意識とは何か？ & 意識の宿る場所	8
4. 150 億個の脳神経細胞すべてをコントールして『神の踊り (リーラ)』に変える方法	11
5. 「精神的 (あるいは身体的) 蟻地獄からの脱出」を可能にする諸前提	20
5. 後書き	21

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

1. 前書き

私は、両親によればですが、生後 4 ヶ月の時「脳性麻痺」に罹りました。この時、40 度以上の高熱を出し、白目をむいた状態が 3 日間続き、小児科の医者は「この子は助からないだろう」と言ったのですが、念のために、脳圧を下げるために髄液を抜く処置が取られ、結果的に、脳がやられることは避けられましたが、左半身不随の後遺症が残りました。

私の人生の記憶は、物心がついた 4 歳時以降のものですが、その意味で、私は、60 年以上、恒常的に、左手の麻痺と緊張を持ち続けてきていました。

私は、幼稚園児の 5 歳の時と、小学校 4 年から 6 年まで、二度、別々の養護施設に入所しました。いずれの施設でも、「幼児性愛」的なトラウマ的体験をたくさんもち、その後普通校に戻った後は、「社会的不適合者」となり、十代、二十代を通じて、絶対抜けられないと思えた「精神的蟻地獄」にいました。

(ちなみに、二度目の施設の退所後、数年してから、父親とともに、この施設を訪れたのですが、「物理療法医」の方に、「申し訳ないです。この施設は、今、開園して 10 年目ですが、その間の当園の諸々の経験から、(開園時に入所した)北岡君のような軽度の症状の子供は、絶対に、こんな施設に入れてはいけない、ということがわかりました。すみませんでした」と言われ、自分がモルモットにされた上で、「人生を狂わされた」ことがわかり、唖然とし、かつ、「専門家」の人々はなんて無責任なんだろう、と思いました。

思うに、私が、常に「専門家」、「権威者」等を疑い、自分自身の経験に照らし合わせて、業界の専門的権威者と言われている人々の主張を評価する努力をしてきているのですが、この私のスタンスの源泉が、この療法医の言葉にあったことが、今、わかりました。)

私は、小学校 4 年から 6 年までいた施設で、毎年、身体障害児と知的障害児の少数の合同クラスで学んだので、まともな授業はほとんど受けていなかった、と言ってもいいです。

それでも、中学入学時から普通校に通ったのですが、英語、数学等に関しては、クラスでもトップクラスの成績を収めていました。どうも、私は、「サバイバルのための処世術」として、子供の時に「加速学習法」なるものを、試行錯誤しながら独自で見つけ出し、身につけていたようです。実は、32 歳の時に、共同創始者のジョン グリンダー式の NLP (神経言語プログラミング) に出会ったので

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

すが、私が人生をかけて「我流」で身につけていた経験則的な学習法の「ほぼそのもの」が NLP によって「見える化」されていたことに気づき、驚きました。

上記の「絶対抜けられないと思えた『精神的蟻地獄』」は、高校、浪人時代、大学時代を通じて、継続し、大学卒業後赴いたアフリカ北岸のサハラ砂漠で、「このような蟻地獄から脱出するには、『悟り／解脱』の道しかない」と思い、特定のインド人導師に弟子入りすることを決意し、サハラ砂漠で仏語通訳として稼いだお金で、1983 年に渡米して、西海岸のオレゴンにいた導師に弟子入りしました。

1983 年と 1985 年に、通算 1 年間滞在したオレゴンの導師の道場では、7 ヶ月間の心理療法コースに参加したりして、「セラピー／瞑想」漬けの日々の修行を続けました。実際に、「クンダリーニ覚醒」の経験もし、「悟りの一瞥」をもつことはできました。ただ、これらの経験は、あくまでも一時的で、たとえば、日本に帰国した途端、また元の自分に戻ってしまう、ということの繰り返しでした。この時点では、「此岸 (現象界) から彼岸 (神的意識) を見た」形での悟りでしかありませんでした。その後、私は「枠から出た (『悟り』等の) 状態を 24 時間継続させる方法論」を模索し始めました。

その後、私は、日英のハーフの女性との結婚を機に、1985 年に英国に渡りました。ロンドンに居を構えましたが、当時私が受講していたセラピー、自己啓発、催眠、代替医療関係のセミナーの参加者等が異口同音に「NLP はすごい」と言っていたので、1988 年の春に、NLP 共同創始者のグリンダー氏が開講した「個人的天才になるための必要条件: どんどん下に重なっていく亀」というワークショップに参加したのですが、NLP が、「枠から出た (『悟り』等の) 状態を 24 時間継続させる方法論」であること、すなわち、「彼岸から此岸を見た」形での悟りが可能であることを、知りました。この時点から、「絶対抜けられないと思えた『精神的蟻地獄』」は、実は、幼児期に築き上げ、その後無意識化されたプログラミング群にすぎず、「元々始めから実体のない妄想」であったことを認識し始め、2001 年の帰国時までには、蟻地獄からの完全脱出に成功しました。

(ちなみに、結婚した女性とは、その後、別居、離婚しましたが、別居後、人間コミュニケーション力を改善するために NLP を学び始めたのであり、NLP で離婚を救えなかったわけではありません。)

その後、NLP の自己適用を続け、2001 年に帰国した後、12 年間 NLP 資格認定ビジネスに従事した後、エグゼキュティブ ライフ コーチング (個人セッション) 業に従事してきています。

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

その過程の中で、NLP 等で真の意味で「化ける」ためには、NLP や GAFAM (Google、Apple、 Facebook、Amazon、Microsoft) 等を生み出した「西海岸文化圏人」のマインドセット (これは、20 世紀以降の「量子力学的パラダイム」と密接な関係があることがわかっています) を身につけておく必要があることが判明し、昨年、「メタ心理学」なるものを創始しました。

その後、メタ心理学ワーク群を独自開発して自己適用を続けてきていますが、つい最近、私がこれまでに NLP によって継続的に枠 (「蟻地獄」) の外に出ることに成功した過程を、メタ心理学のメソッドを通じて、私自身の無意識を象徴している 60 年以上麻痺してきていた左手に適用して、「メンタル エクササイズだけ」で完治できることを確信しました。

私のこの新しい実験は、過去の「絶対抜けられないと思えた『精神的蟻地獄』」が妄想であることが判明した以上、「絶対抜けられないと思えた『身体的蟻地獄』」(すなわち、六十余年来の左手の麻痺) も同じく妄想であることを証明しようとしている「未曾有の企て」です。

本エッセイは、そのような「不可能を可能にする」プロセスについての報告です。

2024 年 7 月
メタ心理学研究所代表
北岡泰典

追記:

本エッセイ執筆後、ある方から、「先生は、NLP によって精神的蟻地獄から脱出した後、メタ心理学によって身体的蟻地獄から脱出しようとしているのですね」と言われたのですが、私は、改めて、その通りだと思いました。

本エッセイに書かれていることは、神経科学者のツールである fMRI の発見以前は不可能だったので、その意味で、メタ心理学は NLP を超えていると思います。

NLP は、共同創始者の二人が、アリストテレス以来 2,500 年間続いた心身二元論の問題を克服した「ラッセル／ベイツン認識論」(注: 22 ページの「用語解説」を参照のこと)を臨床の現場に落とし込むという「偉業」を成し遂げながら、1975 年に創始されたのですが、私の中では、49 年後に書かれた私のこのエッセイは、その偉大な偉業を正統に継承しながら、21 世紀の fMRI の発見に基づき、「完全なる左脳オンリーの心身二元論の問題解決」に成功した「NLP の偉業へのオマージュ」となっています。

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

2. 「絶対抜けられないと思えた『身体的蟻地獄』」からの脱出法について

本エッセイの「前書き」にも書かせていただいたように、

> 私のこの新しい実験は、過去の「絶対抜けられないと思えた『精神的蟻地獄』」が妄想であることが判明した以上、「絶対抜けられないと思えた『身体的蟻地獄』」(すなわち、六十余年来の左手の麻痺) も同じく妄想であることを証明しようとしている「未曾有の企て」です。

思うに、「絶対抜けられないと思えた『精神的蟻地獄』」からの「脱出 (あるいは、生還)」自体、通常は、ほぼ (あるいは、絶対に) 不可能だと思われていると思いますが、それに加えて、「60 年以上も麻痺していた左手が、メンタル エクササイズだけで完全完治する」といった主張は、たぶん、私と同じくらいクレイジーな人々にしか理解できないかもしれません (笑)。

(ちなみに、「絶対抜けられないと思えた『精神的蟻地獄』からの『脱出』」とは、通常、変えることは不可能と思われている「大人になった後の物の考え方 (さらに具体的に言うと、無意識化されている諸々の前提あるいは思い込み)」を「リバースエンジニアリング」して、「チャラにする (初期化する)」ことと等価です。

1983 年の精神的求道の開始以来、四十余年来、古今東西の精神世界的方法論、NLP、比較文化人類学、(ケン ウィルバー式の) 成人発達論、(fMRI の発見により、「神がどのように人間脳を作りたもうたか」を「完全見える化」してきている、驚愕の学問である) 神経科学等、の独自研究をしてきた結果、私は、「絶対抜けられないと思えた『精神的蟻地獄』からの『脱出』」については、すでに、一から十まで、「ステップバイステップの手順」として明示化することに成功していて、私の独自方法論に耳を傾けることの用意のある方々には、その手順群を「直接完全伝授」できるようになっています。

私は、生涯にわたって、「不可能を可能にする」ことを追求してきていましたので (笑)、私の「最後のライフワーク」としての「不可能を可能にする」テーマとして、「絶対抜けられないと思えた『身体的蟻地獄』(すなわち、六十余年来の左手の麻痺) からの『脱出』」を果たし、私の十代からの「夢のまた夢」だった、ニール ヤング (十代の私のアイドルだったロック歌手です) の曲を、両手でギターで奏でること、を目指すことを決意した次第です。)

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

上記で、「[私の主張は] 私と同じくらいクレイジーな人々にしか理解できないかもしれません」と書きましたが、過去 20 年間、現在、西海岸文化圏の思想／文化が蔓延している欧米 (この事実を確認するためには、現在の日本の時事トピックになっている「LGBT」、「SDGs (持続可能な開発目標)」、「気候変動対策」、「脱炭素社会化」、「電気自動車社会」、「GAI/ ChatGPT」、「スーパーのレジ袋有料化」は、すべて、元々の源泉は、西海岸式「カウンターカルチャー」のヒッピーの「エコロジー (生態論重視) 意識」にあることを知るだけで、充分かと思います) に滞在した私自身の意見では、NLP や GAFAM (Google、Apple、Facebook、Amazon、Microsoft) を生み出した西海岸文化圏人であれば、私の主張は理解される、と確信しています。

このことに関連して、私は、最近、『シリコンバレー流 科学的に自分を変える方法 ZONE』という本について、Youtube 解説動画シリーズを配信してきています (紹介サイト: https://www.souldelics.info/jp/zone/)。

私は、この本は、西海岸文化圏人のマインドセットについての、最も適切な解説書であると思っています。

＊＊＊＊＊＊＊＊

ということで、私は、数年前から、「絶対抜けられないと思えた『身体的蟻地獄』(すなわち、六十余年来の左手の麻痺) からの『脱出』」を図るべく、左手の「リハビリ」を行なってきていたのですが、たぶん「好転反応」だと思うのですが、改善度合いは「一進一退」を繰り返してきていました。

ただ、ここ 1 年にわたって、神経科学の研究をさらに続ける過程で、新たな「メタ心理学」ワークを独自開発して、毎日、起床時の「出眠時催眠状態」で自己適用することを続けていたら、どんどん手が動き始めてきていて、約 2 週間くらい前に、将来的に、正常化する、という確たる確信を、私はもった次第です (驚)。

もし仮にこれが本当なら、メタ心理学が対応できない「精神的／身体的臨床ケース」などなくなると思われます。

本特別エッセイでは、どのようにして「絶対抜けられないと思えた『身体的蟻地獄』(すなわち、六十余年来の左手の麻痺) からの『脱出』」が可能になるのか、すなわち、どのようにして「不可能が可能になるのか」についてのプロセスについての報告と解説をさせていただきたいと思いますが、その前に、まず「意識とは何か」について、考察してみたいと思いました。

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

3. 意識とは何か？ & 意識の宿る場所

私は、「意識とは何か？」という問いは、「自分は誰か？」、「自分はどこから来たのか？」、「自分はこれからどこに行くのか？」の人生の三大命題と同じくらい、あるいは、場合によっては、それ以上に重要な哲学的な問いだと思っています。

私は、ジョゼフ ルドゥーという神経科学者の『Synaptic Self (シナプスとしての自己)』という本を Amazon から 2016 年 10 月に注文した時点から神経科学を独自研究し始めましたので、かれこれ過去約 8 年間、神経科学を研究してきていることになります。研究対象者は、エリック カンデル、ジェラルド エーデルマン、クリストフ コッホ、バーナード バース、ジョゼフ ルドゥー、スタニスラス ドゥアンヌ、その他です。

その私の独自研究によれば、20 世紀の西洋心理学は、フロイトの「精神分析」の衰退以降、「意識は存在しない。すべて行動様式に還元できる」と主張したワトソン、スキナー式の「行動心理学」によって全面的支配され、「認知科学」の出現までの数十年間の間、心理学界では、「意識」について語ることは完全タブーとされてきていました。

私の研究が及ぶかぎりにおいてですが、近年の欧米の神経科学者は、そのタブーの呪縛から解放され、意識について語り始めていますが、私が理解するかぎり、往々にして、心身一元論者、心身二元論者、汎神論者等を問わず、ほぼ全員、いわゆる「唯物論的志向性」をもっているようです。たとえば、犬などの動物は、感情をもっているように見えるだけで、実は単なるロボット的な生き物だと考えている (キリスト教義に支配されている) 神経科学者が多いようです (これは、仏教徒の日本人には信じられないことだと思います)。

これらの神経科学者のほとんどの立場は、「意識は脳機能から生まれる派生物である」というもので、私の知るかぎり、この前提に疑問を挟む神経科学者はいないように思われます。

私自身の立場は、「神的意識が現象界を作り出している」という印哲ヴェーダンタ系のモデルに基づいていますので、「意識は脳機能から生まれる派生物であり」、「AI は脳機能を模すことができる」という前提から可能性が指摘されている「シンギュラリティ (自律的な人工知能が人間を上回る知性が誕生させるという仮説)」といったイベントは、金輪際、絶対に起こらない、というふうに考えています。

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

＊＊＊＊＊＊＊

「意識の宿る場所」については、私は、個人的には、「宇宙を作り出している神が宿る場所」とも思っていますので、今後、どれだけ人間の頭が作り出した科学が、その場所を特定しようとしても、絶対特定されることはないだろう、という立場にいます。

この「意識の宿る場所 = 神が宿る場所」の考え方は、「非二元論ヴェーダンタ」の創始者シャンカラチャリヤの「梵我一如説」(自身の真我と外の神はまったく同一であるという説) に基づいています。さらに、私のシンギュラリティ否定説も、このことと関連しています。

比喩としては、二枚の合わせ鏡を前にすると、自分の複数の顔が永遠に鏡の中で後退していきますが、一番最後の顔は、鏡の角度上、絶対に見ることはできません。これについては、私は、「永遠に後退するメタ (観察者) が無限数あり、最後のメタが神である」であると、言っていきていますが、ある意味、このことが、人間の科学が神を捉えることは絶対ないことの象徴になっています。

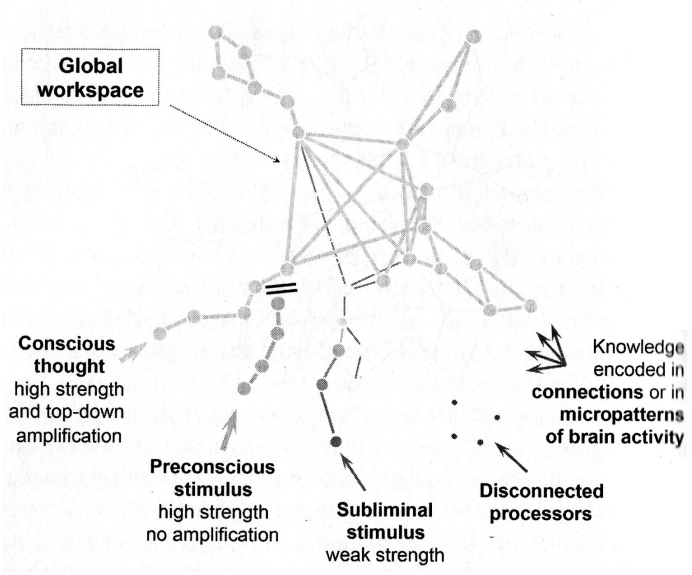
実は、「意識の宿る身体的部位」に関しては、類推しか許されないと思いますが、「近代科学的思考の父」のデカルトは「松果体」である可能性を指摘しました。大半の神経科学者たちによってその可能性は否定されてきていますが、もしかしたらデカルトは正しかった、と考えているごく一部の学者もいるようです。

「興心館」という學舎の代表で、日産グローバル株式会社代表取締役および日産鮎川義塾主宰の徳山暉純氏の動画によれば、聖徳太子の教えに従って、「哲学を学ぶ必要がある。哲学を通じて『間脳視床下部』 (いわゆる『第三の目』のことです) を刺激すれば、神的世界からのインスピレーションが得やすくなる」ということを説いていますが、「視床下部」も、類推される「意識の宿る身体的部位」の候補の一つかとはと思います (あくまでも、個人的には、ですが、現在の私自身は、デカルトの松果体説 (精神世界では、一般的には、第三の目は、視床下部ではなく松果体にある、と言われています) に組みしています)。

実は、神経科学者たちは、「意識がどのように作り出されるか」のモデルを提示していて、その一つの、スタニスラス ドゥアンヌの「広域神経細胞処理空間 (Global Neuronal Workspace、GNW)」は、非常に興味深いものです。

GNW は、認知科学者で神経科学者のバーナード バースの「意識の劇場」モデル (本紙面では、説明は割愛させていただきます) をドゥアンヌがアップデートしたモデルで、次ページのイラストのようになっています。

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.



ドゥアンヌによれば、意識が生まれる GNW まで一つの脳神経細胞の発火の回路が到達するし方が 5 つある、とされています。

一つ目は、脳神経細胞から GNW まで到達する「意識的思考」です。

二つ目は、脳神経細胞から GNW まで到達する可能性があるが、回路が開くまで待機している「前意識的刺激」です。

三つ目は、局所的発火に留まって、脳神経細胞から GNW まで到達することはない「サブリミナル刺激」です。

四つ目は、GNW まで到達することはない、「隔絶されたプロセッサ」です。例としては、GNW は、呼吸器官を直接意識化できないことが挙げられます。

五つ目は、GNW の外側で発火している複数の脳内活動が、そのものでは何の意味もなさないが、GNW 上で「統合」された時初めて意味をなすケースです。ドゥアンヌは、具体的な例を挙げていませんが、私は、たとえば、NLP の「サブモダリティ」モデルが、この一例ではないかと思っています。

以上が、ドゥアンヌの GNW モデルですが、最近の私のメタ心理学ワークの独自開発の基盤となるアイデアとして、非常に大きな影響を私に与えてきているモデルです。

たとえば、最近の私の「パニック状態は、脳網全体がプログラミングに憑依されている状態である」とか「一つの脳神経細胞の発火を局所的に抑えたら、不動心のままでいられる」といった主張は、この GNW モデルに基づいています。

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

4. 150 億個の脳神経細胞すべてをコントールして『神の踊り (リーラ)』に変える方法

前章では、周り道をして、「意識とは何か？ & 意識の宿る場所」について語らせていただきましたが、本章では、第二章で書かせていただいた以下の発見について、どのようにしてそれが可能になったかについての報告と解説をさせていただきたいと思いました。

> [私は] ここ 1 年にわたって、神経科学の研究をさらに続ける過程で、新たな「メタ心理学」ワークを独自開発して、毎日、起床時の「出眠時催眠状態」で自己適用することを続けていたら、どんどん手が動き始めてきていて、約 2 週間くらい前に、将来的に、正常化する、という確たる確信を、私はもった次第です (驚)。

なお、以下の各セクションで解説されている内容は、「150 億個の脳神経細胞すべてをコントールして『神の踊り (リーラ)』に変える方法」というタイトルの Youtube 動画 (https://youtu.be/giYgs1BV50c) の内容を補足／敷衍したものとなります。

「全宇宙 ＝ 意識 ＋ 非意識」ただし「非意識 ＝ 無意識 ＋ 外界」

この公式は、まず、「絶対抜けられないと思えた『精神的蟻地獄』からの『脱出』」についての私自身の経験から生み出されたものです。

すなわち、私は、物心がついた時から、精神的導師に弟子入りして、一時的に「絶対抜けられないと思っていた蟻地獄」から出ることができた 27 歳の時まで、さらに言うと、NLP に出会い、その蟻地獄から出た状態を永続的に保てるようになった 32 歳までは、継続して、「出口なしのマトリックス」の中にい続けました (ちなみに、30 年間は約 10 億秒あります)。

その後、NLP を自己適用し、「マトリックスから出た状態」を恒常化させることに成功し、帰国後は、十年くらい前に、西海岸文化圏人のように「現実を仮想現実化」できていない日本人がどのようにすれば現実を仮想現実化できるかの「RPG ゲーム」演習を独自開発した後、昨年、「メタ心理学」を創始しました。現在の私には、以下のことが可能になっています。

> 私は、「絶対抜けられないと思えた『精神的蟻地獄』からの『脱出』」については、すでに、一から十まで、「ステップバイステップの手順」として明

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

示化することに成功していて、私の独自方法論に耳を傾けることの用意のある方々には、その手順群を「直接完全伝授」できるようになっています。

ということで、私は、すでに、「精神的蟻地獄からの恒常的脱出」に成功していて、十代からの「夢のまた夢」だった文字通りの奇跡を達成した、という思いがあります。

その中で、「メタ心理学」ワークの私の麻痺した左手への自己適用と、本章で解説されている神経科学関連のモデルの「体感的理解」を続けてきた結果、「どんどん手が動き始めてきていて、約 2 週間くらい前に、将来的に、正常化する、という確たる確信を、私はもった次第です」。

この確信ゆえに、私は、今、「絶対抜けられないと思えた『身体的蟻地獄』(すなわち、六十余年来の左手の麻痺) からの『脱出』」をすべく、メタ心理学ワークの左手への自己適用を続けている次第です。

この中で、私は、以下の公式を思いつきました。

「全宇宙 = 意識 + 非意識」ただし「非意識 = 無意識 + 外界」

私は、宇宙は、今現在意識化されている部分と意識化されていない「非意識」とで構成されている、と定義したいと思いました。

前述の Youtube 動画では、対談者の女性の方が、「潜在意識と顕在意識はどうなるのですか？」と質問されましたが、これらは、定義上、この公式から排除されています。

また、そもそも論として、私は、常々、「誰も、無意識と潜在意識の違いと、意識と顕在意識の違いの定義をすることはできないでしょう」と主張してきています。

で、次に、私は、「非意識」は、「無意識」と「外界」に分けられると、定義していますが、「無意識」は「個人的無意識」として、「外界」は「集合的無意識」として再定義できると思った次第です。

ここで何を言いたいかと申しますと、私は、何十年も陥っていた「絶対抜けられないと思えた『精神的蟻地獄』からの『脱出』」には、すでに成功したわけですが、これは、ある意味、「意識がコントロールできないと思っていた非意識」(の一部) のコントロールに成功した、ということになります。

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

これまでの私は、「絶対抜けられないと思えた『精神的蟻地獄』」よりも「絶対抜けられないと思えた『身体的蟻地獄』」(すなわち、六十余年来の左手の麻痺)からの脱出の方がより難しいと思ってきていたわけですが、これまでの「精神的蟻地獄からの脱出法」を「身体的蟻地獄からの脱出」にも使えるという確信に至り、現在、六十余年来の左手の麻痺の完全克服を目指しているところです。

ですので、「精神的蟻地獄からの脱出」に続いて「身体的蟻地獄からの脱出」も達成した暁には、私は、「非意識」の中の「無意識 (個人的無意識)」の「完全コントロール」に成功した、と言えるのではないか、と思いました。

もし仮に、「無意識 (個人的無意識) の完全コントロール」に成功した暁には、私の場合は、精神的および身体的な二重の意味での「絶対脱出不可能なマトリックスからの脱出」に成功したプロセスを、より広大な世界である「外界」(すなわち、「集合的無意識」) にも拡張して、「外界を完全コントロール」することも、まったく夢ではないと、今、考えています。

もしこのような未曾有のことが可能になったら、これこそが「悟り／覚醒／最終的解脱」ではないか、と思っています。

ちなみに、Youube 動画では、私は、「個人の無意識 + 集合的無意識」である「非意識」の総体が、実は「メタ意識」ではないか、という大胆な仮説も提示させていただいています。

ところで、「無意識 (個人的無意識) が外界 (集合的無意識) をどのようにしてコントロールできるか」について、興味深い比喩があります。

それは、PC の例です。私は、個人的無意識に相当する自分の PC の中で起こっていることは、常に、集合的無意識に相当する、オンラインの全 PC 群から成り立っているインターネット全体の情報の流れに影響を与えているので、自分の PC とインターネット全体は、瞬間瞬間に置いて、継続的に「相互前提」の依存関係にある、と考えています。

もし、この比喩が示唆するように、自分の「個人的無意識」と「集合的無意識」が、完全な「相互前提」の依存関係にあるのであれば、自分の瞬間瞬間の微細な「一挙手一投足」が宇宙全体に影響を与え続けている、と私は考えていますので、ある意味、「個人の無意識が集合的無意識にどのようにしてコントロールできるか」の命題自体が、そもそもナンセンスで、すでに、「個人の無意識は、集合的無意識をコントロールし続けている」という結論が導き出されるべきかと思っています。

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

脳神経細胞系統リサイクリング

「細胞神経細胞系統リサイクリング (Neuronal Recycling)」は、スタニスラス ドゥアンヌが『How We Learn』で提唱した非常に興味深いモデルです。

ドゥアンヌによれば、各脳神経細胞自体の「可塑性」は高いが、脳神経細胞系統の回路自体は、長年の進化の影響を受けて、柔軟性のない解剖学的拘束を受けています。

なので、人間が初めてアルファベット文字や数字を発明した時、必然的に、すでに存在していて、別の用途に使用されていた「脳神経細胞系統の回路」を「再使用」することを余儀なくされます。

「細胞神経細胞系統リサイクリング (NR)」の一例としては、手で文字を書くときに使われる細胞神経細胞系統を「再使用」することで、足を使って、砂に上に同じ文字を書くことが可能になるケースがあります。

すなわち、NLP の「アンカーリング (人間に当てはめた時の条件反射)」は、「刺激 (行動) → 反応 (行動)」の形で機能していますが、NR は、ある情報処理レベルのアンカーリングを別のレベルで適用する、という意味で、「抽象的アンカーリング」あるいは「コンセプト アンカーリング」と定義できるかと思います。

個人的には、私は、「アンカーリング」は、1990 年代からの神経科学業界での「fMRI の発見」以前のコンセプトであると思っていて、NR といったモデルは、「fMRI 後」でしか、考案できなかったモデルだと思っています。

Youtube 動画では、「左手を動かすこと、語学の学習、NLP の習得、数学の学習等は、すべて、詳細は違えど、プロセスは同じです」という指摘がされていますが、このような抽象度の高い考え方は、NR のモデルがあってこそ、可能になっています。

ということで、英語学習の場合、(上から)「統語 (SVO 等の五文型)」、「文法」、「言い回し」、「発音」、「単語」、「音素」等の各レベルの脳内のプロセッサ (脳神経細胞系統のユニット) が同時並行的に機能して、初めて「読み書き話し聞く」ことができていますが、私は、左手をメタ心理学ワークで「リハビリ」する過程で、身体的動作を正常に行うためにも、「統語 (五文型)」、「文法」、「言い回し」、「発音」、「単語」、「音素」等の各レベルに相当する、身体的動作パターン (これは NR に相当します) があることを発見し、各レベルでの

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

身体的動作パターン (たとえば、肩の回し方、腕の回し方、肘の回し方、手首の回し方、手の開け閉め、指の動き、等) をまず個別に「改善」する訓練をした後、それらの動きを全体的にまとめる、というプロセスを繰り返していたら、「夢のまた夢」だった「左手がどんどん動き始める」という「奇跡」が起こり始めた次第です。

私は、「無意識」は、要は、四歳児までに自分が確立してしまって、その後意識化されてなくなっているプログラミング群の総体のことであると考えています。

たとえば、左手を緊張させる、あるいは麻痺させるための回路はすでに、四歳時までに無数に確立されてきていて、その回路を発火させる元になった脳神経細胞も無数にあるはずなので、左手の緊張を引き起こしていた脳神経細胞すべての発火を局所的に留めて、緊張を事前に回避させることは一朝一夕にはできないと思っていますが、今後、(語学習得のケースと同様) 数年内には、左手は正常化するのでは、と見込んでいます。

ちなみに、Youtube 動画でも示唆させていただいたように、私は、人間の意識が対応できるのは、毎瞬、単一の脳神経細胞だと考えています。

このことに関連して、上述の神経科学者のバーナード バースは、『On Consciousness』で、二点、実に興味深いことを指摘しています。

一つ目は、「7 つの脳神経細胞系統回路を辿れば、[150 億個の] 一つの脳神経細胞から他のどの脳神経細胞にも至れる」という指摘です。

二つ目は、「人間の意識を使えば、脳内のどの部分にもアクセスできる」という指摘です。バースによれば、被験者は、30 分あれば、脊髄部分の単一の「運動脳神経細胞」をヘッドホーン経由でコントロールして、「ドラム音」を奏でさせることができる、ということです。

バースのこの二つの指摘は、今回の私の「絶対抜けられないと思えた『身体的蟻地獄』(すなわち、六十余年来の左手の麻痺) からの『脱出』」の実験プロジェクトの最大級の「勇気づけ」となっています。

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

不活性化脳神経細胞回路 → 活性化脳神経細胞回路 → 非活性化脳神経細胞回路

このモデルは、神経科学者のクリストフ コッホが『The Feeling of Life Itself』で提唱した「不活性化大脳皮質 vs 非活性化大脳皮質」モデルに基づいています。

以下に記されていることは、私自身がコッホの「不活性化大脳皮質 vs 非活性化大脳皮質」モデルを敷衍した内容になっています。

たとえば、飛行機に搭乗した際、客室乗務員が安全ベルトや救命道具の装着のし方や緊急脱出出口の場所について説明／案内をすることで、乗客は、頭の中で「リハーサル」しながら、それまでは活性化されていなかった脳神経細胞回路 (= 不活性化脳神経細胞回路) を活性化できます (= 活性化脳神経細胞回路)。その後は、リハーサルの内容は忘れますが (= 非活性化脳神経細胞回路)、飛行機事故が起こって、非常事態になったら、その乗客は非活性化されていた脳神経細胞回路を再び無意識的に再活性化することで、飛行機から脱出することができます。

ここで明らかなことは、一度でもいいのですが、活性化したことのない脳神経細胞回路は再活性化することはできない、という厳然たる事実です。

飛行機事故の際、飛行機から脱出するために必要な脳神経細胞回路を活性化した上で非活性化していた乗客がその回路を再活性化して、脱出出口に向かっていた時、その脇で、その回路を活性化していなかった別の乗客が「安全ベルトの外し方がわからない」と叫び、その後、機内で死亡した、という報告もあるようです。

このことには、二つの意味合いがあります。

1) 私が NLP 創始者のグリンダー氏から学んだ最重要 NLP モデルの一つに、「チョイスポイント (選択点)」というものがあります。これは、たとえば、Google Map で、360 度回転できるポイントのようなものです。

チョイスポイントにいる人は、可能性としては、複数の行動選択肢が取れるのですが、実際上、その選択肢が一つになっていている場合は、まったく行動の自由がなくなっていて、 プログラミングに支配されたロボット人間になってしまっています (いわば、上述の、安全ベルトの外し方がわからず、亡くなった乗客のケースです)。

一方、いくつかの行動選択肢 (特定の脳神経細胞回路) を一度活性化した上で非活性化した人は、「いざという時にいつでもその回路を再活性化できる」ので、

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

チョイスポイトにおいても、複数の行動選択肢を実行に移すことができるようになり、行動の自由度が著しく高まります。

2) 私は、「ノーマンド → マインド → メタマインド」というモデルを開発しました。このモデルの開発の経緯は、以下の通りです。

私は、英国にいた三十代に、煙草を完全禁煙しましたが、このきっかけになったのは、英国の深夜番組での「喫煙派 vs 禁煙派」の視聴者参加型グループ討論の番組でした。この討論の内容は、本当に「低級」で、私は、反吐が出るほどの極端な嫌悪感に襲われました。それまでにも何度か禁煙と喫煙を繰り返していましたが、このときばかりは、あまりの嫌悪感に、あまりにもくだらないこれら両方の立場を「金輪際超越」してみたいと心底から思いました。そのとき、ふと、現象的に、仮にもし煙草を吸い続けた場合、決定的に、否定できない形で自分は喫煙派に分類されざるをえないが、仮に煙草を吸うという行為を現象的にしない場合、確かに禁煙派と分類される可能性もあるが、同時に、喫煙派と禁煙派の両方を超えた、NLP でいう「メタ」の立場と分類される可能性もある、少なくとも、煙草を吸うかぎりその「超越の立場」に立つことは論理的に絶対不可能だ、という思いに至りました。この思いが、私を完全禁煙させたという次第でした。

「ノーマンド → マインド → メタマインド」モデルに関連する対応表の図を、以下に示します。

Meta Mind Work 対応表

北岡ワーク	印哲等	トランスパーソナル心理学	機能	論理性
メタ マインド	超意識	超自我	自己と非自己の再統合	非二元論
↑	↑	↑	↑	↑
マインド	意識	自我	自己と非自己の分離	二元論
↑	↑	↑	↑	↑
ノーマインド	無意識	前自我	自己と非自己の未分化	一元論

Copyright©2010 by Taiten Kitaoka. All rights reserved internationally.

たとえば、ある人が、ある特定の場所でフランス語を「喋っていない」場合、他の場所で喋れるのか (この場合は、自由度があります)、いっさい喋れないのか (この場合は、自由度はありません) のどちらかですが、現象学的には、その区別をすることは不可能です。

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

私の「絶対抜けられないと思えた『身体的蟻地獄』(すなわち、六十余年来の左手の麻痺) からの『脱出』」の実験プロジェクトにおいては、左手を動かすためのさまざまな脳神経細胞回路を活性化した上で、非活性化する訓練を続けることで、左手の「全体の動き」がどんどん改善し始めるのを目の当たりにしてきています。

(このことの意味合いは、「脳神経細胞系統リサイクリング」のセクションで書かせていただいた次の内容です。

> 私は、左手をメタ心理学ワークで「リハビリ」する過程で、身体的動作を正常に行うためにも、英語の「統語 (五文型)」、「文法」、「言い回し」、「発音」、「単語」、「音素」等の各レベルに相当する、身体的動作パターン (これは NR に相当します) があることを発見し、各レベルでの身体的動作パターン (たとえば、肩の回し方、腕の回し方、肘の回し方、手首の回し方、手の開け閉め、指の動き、等) をまず個別に「改善」する訓練をした後、それらの動きを全体的にまとめる、というプロセスを繰り返していたら、「夢のまた夢」だった「左手がどんどん動き始める」という「奇跡」が起こり始めた次第です。)

ということで、「脳神経細胞系統リサイクリング」も「不活性化 → 活性化 → 非活性化脳神経細胞回路」も、単なる「机上の空論」ではなく、実際に身体的症状の改善を可能にする「実用的モデル」であることが証明されてきています。

実に驚くべきことは、この二つのモデルを左手の麻痺の完治に適用する過程で、「もつれにもつた凧糸を一本の糸にほぐす」作業を続けた結果、「どのレベルの脳神経細胞回路がどのレベルのどの脳神経細胞回路に影響を与えているかが、手に取るように、わかってきたことです。

素粒子モデル

私は、主に、本章で言及した「脳神経細胞系統リサイクリング」と「不活性化 → 活性化 → 非活性化脳神経細胞回路」モデルを左手に自己適用しながら、「絶対抜けられないと思えた『身体的蟻地獄』(すなわち、六十余年来の左手の麻痺) からの『脱出』」の実験プロジェクトを遂行してきていて、現時点までで、「目覚ましい成果」を挙げてきています。

結局、「現実は変わらない」という「プログラミング < 現実」(後者が前者を作り出している) ではなく、「現実はいかようにも変えれる」という「プログラミング > 現実」(前者が後者を作り出している) という公式を、これまでは、「精神的蟻地獄からの脱出」に関しては、証明し終わっていましたが、現在は、「身体的蟻地獄からの脱出」に関して証明しようとしているところです。

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

(ちなみに、私自身、NLP を知った当初は、おそらく本エッセイの読者の多くの方々の場合のように、「私のようなシビアな『現実』の精神的問題が、幼稚園の遊戯のような『空想』のメンタルエクササイズで解決するはずはない」と思い込んでいました。ただ、この思い込みは、1988 年にグリンダー式 NLP を知った際、すべて、ぶっ飛びました (笑)。今となっては、当時の、この「素人」の思い込みは、「淡い、ほろ苦い記憶」でしかありません (笑)。)

このプロセスは、天才のジャグラーは、それ以上の天才になろうとしたら、無意識化されている動作ユニットを個々に分解して、改善したい動作ユニットを意識的に学習した後、再度無意識化して、全体を『リバースエンジニアリング + 再構成』する必要があるケースと同等の意味をもっています。

私の現在のクライアントのお一人が、このメカニズムを以下のように再定義されて、このモデルを「素粒子モデル」と名付けられました。

「今あるメカニズム」→「そのメカニズムを構成している要素の分析」→「メカニズムと要素の関係の分析」→「メカニズムと要素の関係のリバースエンジニアリング」

ということで、私は、

「精神的 (あるいは身体的) 蟻地獄」→「素粒子モデル」の適用 →「150 億個の脳神経細胞すべてをコントールして、ホーリスティックに『神の踊り (リーラ)』を踊らせる内的世界」

の未曾有の旅 (私は、この旅を「内的宇宙飛行」とも呼ぶこともあります) を旅している最中です。この先に何が起こるか、ワクワクしています。

メタ心理学新ワークについて

「150 億個の脳神経細胞すべてをコントール」Youtube 動画の「実践編」で、私は、「正反合逆転ワーク」、「刺激と感情の間にスペースがある」等のメタ心理学の新簡易ワークを紹介させていただきましたが、その後、特に、本エッセイの執筆中に、これらのワークをさらに進化させた、誰でも「DIY できる」新しい簡易ワークを複数開発してきています。

メタ心理学ワーク受講者の方々に、今後、これらの新ワークを紹介させていただきたいと思っています。

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

5. 「精神的（あるいは身体的）蟻地獄からの脱出」を可能にする諸前提

以上が、「絶対抜けられないと思えた『精神的あるいは身体的蟻地獄』からの『脱出』」の実験プロジェクトの内容ですが、本章では、本プロジェクトの裏にある、いくつかの「諸前提」を列挙してみたいと思いました。

* すべての思考と行動は、四歳児までに確立した単なる「癖」であり、「完全リバースエンジニアリング」が可能である。

* 通常、四歳児までに確立した単なる「癖」であるプログラミング群が、その後の人生において「固着」してしまい、それを「変えることのできない現実」である、と誤認識しているだけである。

* 自分の無意識とは、四歳児までに確立され、その後「『意識外化』されたプログラミング群の総体」で、それは、あくまでも自分の一部であり、かつコントロール下に置くことが可能である。

* 人間意識は、一時期に一つの脳神経細胞の発火反応をコントールすることができる。この過程で、通常は、瞬時に「脳網全体のプログラミングの憑依」を引き起こしていた一つの脳神経細胞の発火を、局所的に留めることができるようになり、「脳網全体のプログラミングの憑依」を事前防止することができるようになる。

* 現時点で、何の苦もなく実行できている思考と行動（たとえば、日本語を話すこと）も、子供の時ありとあらゆる試行錯誤をした上で確立されている。同様に、新しい思考と行動様式の確立には、一定の労力と努力が必要となる。

*「心と体は一つのシステムを構成している」ので、どのような身体的症状も、物理的欠損等のケースを除いて、メンタルエクササイズだけで、改善／完治することは可能である。

* 身体的症状が、物理的欠損等のケースを除いて、メンタルエクササイズだけで、改善／完治した場合、脳神経細胞群に実際の物理的変化が引き起こされている。このプロセスは「メンタルエクササイズだけによる実際の脳内回路の物理的灌漑」と呼ばれる。

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

6. 後書き

以上が、「150 億個の脳神経細胞すべてをコントールして『神の踊り (リーラ)』に変える方法」あるいは北岡式「内的宇宙飛行の旅」の内容でしたが、いかがでしたでしょうか。

私は、27 歳から精神世界の研究を、32 歳から NLP の研究と実践をし始めた後、8 年前から神経科学の研究を始めた時、どうも、ゆくゆくは「精神世界／NLP／神経科学」の融合的研究結果を、「絶対抜けられないと思えた『身体的蟻地獄』(すなわち、六十余年来の左手の麻痺) からの『脱出』」のために適用したい、と思ったようです。

本エッセイで書かれていて、私が可能だと主張していることは、神経科学の誕生以前、さらに言えば、「『神がどのように人間脳を作りたもうたか』を『完全見える化』してきている fMRI」の発見以前、さらには、本エッセイで紹介した神経科学者が提唱する「細胞神経細胞系統リサイクリング」、「不活性化 → 活性化 → 非活性化脳神経細胞回路」等のモデルの開発以前、は、単に不可能だった、と思います。

その意味で、本エッセイで指摘したように、私の知るかぎり、ほとんどの神経科学者は、「意識は脳機能から生まれる派生物である」の立場を取っている唯物論者である一方、おそらく瞑想家や宗教家は、「単なる唯物論者の発見によって、現象界を超えた悟りの世界が『見える化』されることは絶対ない」と「胡座をかいて」、「たかをくくって」いると思いますが、ただ、「『神がどのように人間脳を作りたもうたか』を『完全見える化』してきている fMRI」の発見「だけ」は、彼らに「失禁」させるだけの驚愕をもたらせるはず、と私は、見ています (実際、私の過去のケースがそうでしたので (笑))。

なお、本エッセイ内の私の主張は、すべて、私の左手の動きが「完治」するまでは、「仮説」に留まることは、私にはわかっていますが、ただ、完治した後、私の主張はどうなるのか、極めて強い興味があります。

なお、私が今もっているマインドセットこそ、60 年代からの西海岸文化圏人がもっていて、NLP や GAFAM を生み出したマインドセットそのものだと思っていて、私のメタ心理学メソッドによって、日本人も、西海岸文化圏人と同じくらい、あるいは、それ以上のイノベーションを引き起こせると確信していますが、このテーマは、また別のエッセイで扱いたいと思っています。

ご精読ありがとうございました。

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.

本エッセイ参考文献情報

以下の参考文献は、すべて、英語文献です。

8 ページ:
- Joseph Ledoux. *Synaptic Self.* Middlesex, England: Penguin Books ltd., 2002.

9 ページ:
- Bernard Baars. *On Consciousness.* New York: The Nautilus Press, 2019. Part II & Part III, Pages 52 - 535.

10 ページ:
- Stanislas Dehaene. *Consciousness and the Briain.* New York, NY: Penguin Books, 2014. Page 161 - 198. (イラスト図は Page 192 から引用)

14 ページ:
- Stanislas Dehaene. *Consciousness and the Briain.* Suffolk, UK: Penguin Books, 2020. Pages 121 - 126.

15 ページ:
- Bernard Baars. *On Consciousness.* New York: The Nautilus Press, 2019. Page 95.

16 ページ:
- Christof Koch. *The Feeling of Life Itself.* Cambridge, MA: MIT Press, 2020. Pages 116 - 117.

22 ページ:
- Gregory Bateson. *Angels Fear.* London, UK: Rider Book, 1987. Page 14.

用語解説

- 「ラッセル／ベイツン認識論」(本文 5 ページ)

  「NLP の父」の一人である、グレゴリー ベイツン (ベイトソンは誤表記です) は、死後出版の著『Angels Fear』(訳書名『天使のおそれ』) で、2,500 年前にアリストテレスによって提言され、デカルトが複雑化した諸問題 (たとえば、心身二元論) は、彼自自身と彼の師匠のバートランド ラッセルの認識論等によってすでに解決されたとまで示唆しています。

©2024 Taiten Kitaoka, Metapsychology Institute & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally.